

彩発見

中嶋嶺雄さん (国際教養大学学長)

本年4月に開学した全国初の公立大学法人・国際教養大学は、そのユニークな個性によって順調なスタートを切っているが、嬉しい悲鳴の一つは、見学者や視察団が引きもきらないことである。

そのような折に私は、時間があつたらぜひ角館へ行ってください、とお勧めすることにしてゐる。東北の小京都として知られる角館町は、今に残る武家屋敷の町並みや枝垂れ桜、それに松木内川の土手に続く桜並木によって、観光的には全国に知られるようになった。しかし40年もの歴史を持つその角館の町名が今、町村合併によって消えようとしていることを最近知った。田沢湖町などと一緒になって「仙北市」になるというのだが、もしそうなるといふことに残念である。町村合併に

市町村合併避けられぬが



歴史的地名は公共財

は、財政上の問題だけでなく、歴史や文化の視点が欠けてはならないからである。

もとより、地方交付税の減少とともに地方自治体の財政はきわめて厳しくなるだけに、行政のスリム化・効率化のためにも、市町村合併は避けられない流れであろう。ましてや来年3月末、延びてもさらに1年間のみを期限にして財政上の優遇措置付きの市町村合併特別法を活

用できるという特典があつてみれば、多くの市町村が合併を急ぐのも理解できる。だが、これからは本当の意味で地方が輝かなければならない時代なのである。そのような「地方の時代」にはそれぞれの地方が固有の歴史と文化に根づいたアイデンティティーを自覚し深めることによって、単なるお国自慢の域を脱した、世界に通ずる特色を持つことがぜひとも必要になる。

松尾芭蕉が奥の細道を辿って出羽の国、今日の秋田県最南部・象潟(きやうがた)に来て詠んだ「象潟や雨に西施(せいし)が合歓(がくわん)の花」の名句で知られる象潟は、当時、大小無数の島が海に浮かび、松島にも負けない景勝地だったとのこと

で、芭蕉が奥の細道を辿ろうとしたのは、象潟を見たかったからだとの説もあるほどである。司馬遼太郎が「街道を行く」の旅で秋田に来て、空港から真っ先に訪れたのも象潟であった。これほど歴史的かつ文化的な由緒があるのに、その「象潟」の町名が消えようとしていた。最近流行の町村合併という怪物の餌食にされるところだったのである。象潟町が近隣の仁賀保町、金浦町との合併協議を離脱して「象潟」という歴史的地名を守ったのは、金蔵(きんぞう)前町長の識見によるところが大きかったが、今再び象潟の名前もなくなるかもしれないという。

一方、私の故郷信州では、島崎藤村ゆかりの木曾の馬籠宿をもつ山口村が村民の多数決で中津川市に越境合併しようとしている問題をめぐって、激しい論議が起きようとしている。

なかじま・みねお 1936年長野県松本市生まれ。東京大学大学院修士、社会学博士。95、01年東京外国語大学学長。カリフォルニア大学客員教授などを歴任。現在、文部科学省中央教育審議会委員(大学院部会長・外国語専門部会主査)。著書に「北京烈烈」(サントリ―学芸賞)、「国際関係論」など。03年度「正論大賞」受賞。

民主主義の時代はそこに住む人々の民意が尊重されなければならないが、同時に、歴史によって培われてきた文化価値は、その地名ともどもその地に生きる人々の時空を超えて、広く国民全体の、さらには国民全体の公共財なのだという観点も忘れてはならない。歴史への背理にならないためにも。